

第三次評価者（学識経験者）の講評

元校長 野尻泰弘

○現在、働き方改革について、兎角言われている。教育界においても多忙な教師の毎日について問われているところである。あれもこれもではなく、学校の実態を把握し、必要な指導事項は何なのかを絞って、それに集中し、一つ一つを解決していく。そして、次に進めて行く、焦らずにゆっくりと指導することである。その中から、児童・生徒が安心して、学校生活を送ることができる。本来持っている力を出すことができるのである。保護者にも学校への信頼が厚くなる、学校行事にも保護者は進んで出席するようになる。「年々、学校全体の雰囲気が明るくなってとてもいいなあと思います。」の感想を聞くことができるようになった宮水小学校である。

○平成27年度の重点指導事項は、生徒指導における基本的生活習慣の育成と学力の向上（国語科における音声表現力の育成）であった。これは、廊下歩行、靴並べ、あいさつ等の集団行動が不十分な点と学力の学年差が大きいことが実態としてあった。結果として、集団行動の徹底や集会時における音声言語の表現力において、向上が見られた。

○平成28年度は思考力の育成を算数科の授業をとおして行うこととその基盤となる基本的生活習慣の育成であった。学力テストの結果、全国平均を下回った。B問題の力不足と、A問題の個人差が大きいことが分かった。また、あいさつ等も改善はみられたが、地域へのあいさつなどが問題が残った。そこで、主題研究において、校務分掌に取り入れて、課題解決にあたった。学力テスト面では学年差、個人差が縮小し、平均値も全国平均を上回った。一方、基本的生活習慣においては、全校で取組んだあいさつ運動や生活リズムの個人指導など成果が出ている。

○平成29年度は、2年間の成果と実態を踏まえて、基本的生活習慣の育成をやや軽くし、学力重視にシフトを移した。前年度から課題の思考力の育成について、算数科をとおして行うことを探ることにした。全国平均は多少上回ったものの、思考力育成においては、まだ、力不足であった。そこで、学力テストの問題の精査をおこない、実態分析の結果、授業中に話し合うことが思考力を育てるにつながるという共通理解をし、具体的に「筋道を立てて、説明しあうことができる児童の育成」という児童像を設定し、授業の改善と算数科以外の学級経営全体の中で、主体的な取組みが思考力の育成につながるという観点で研究を進めた。職員の算数授業の質の向上に対する意欲が高まってきており、CRTの結果は前年度より、高くなっているが、B問題に対する子どもたちの実態は、十分ではない。次年度の課題である。

